

CSI 委託事業 海外出張報告書

平成 21 年 4 月 9 日

所 属：九州大学附属図書館 e リソースサービス室
 職 名：リポジトリ係
 氏 名：星子奈美

下記の通り報告いたします。

期 間	平成 20 年 9 月 22 日 ～ 平成 20 年 9 月 26 日
出張目的	(1) ARROW Discovery Service との協議 (2) Open Access and Research Conference 2008 への参加
用務先	(1) National Library of Australia, Australian National University ：キャンベラ【オーストラリア】 (2) Stamford Plaza Hotel：ブリスベン【オーストラリア】
用務	(1) AIRway プロジェクトの説明、協力可能性についての協議 (2) 機関リポジトリや研究データの共有など、オープンアクセスに関する広範な話題に関する情報交換
出張内容	<p>(1) ARROW Discovery Service との協議</p> <p>9 月 22 日 (月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ National Library of Australia を訪問。オーストラリア国内の機関リポジトリを包括的にハーベスティングする ARROW Discovery Service のサービス担当者、Debbie Campbell 氏、Alison Cornes 氏と会談。AIRway プロジェクトの説明を行った。さらに SRU(Search/Retrieve via URL)を用いて ARROW Discovery Service のデータを取得し、AIRway で利用することが可能であることを確認した。 <p>9 月 23 日 (火)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Australian National University を訪問。CAUL(Council of Australian University Librarians) の Executive Officer である Diane Costello 氏と会談。AIRway プロジェクトの説明を行った。AIRway プロジェクトにおいて ARROW Discovery Service のデータを試験的に利用する可能性があることについて了承を得た。 <p>(2) Open Access and Research Conference 2008 への参加 [Open Access and Research Conference 2008 について] 主催：Open Access to Knowledge (OAK) Law Project The QUT Division of Technology, Information and Learning Support The QUT Faculty of Law</p> <p>会議概要：オープンアクセスの現状と将来、オープンアクセスに関する法的な話題、研究データの共有、研究業績の評価指標など、広範なテーマを扱う。 参加人数：約 200 名</p> <p>9 月 24 日 (水)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 下記のプレゼンテーションを聴講した。 <p>○John Wilbanks (Science Commons) 「The Future of Knowledge」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ "Knowledge" は、レゴブロックのようなもので、個々の "Knowledge" を組み合わせることで大きくなるため、共有することが重要である。 <p>○Alma Swan (Key Perspectives) 「Open Access : The Next Five Years」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 著作権は著者を守るためのものであるはずなのに、逆に OA の障害になっ

出張内容	<p>ているという矛盾がある。大学が組織としてサポートする重要性がある。</p> <p>○Richard Jefferson(CAMBIA and BIOS Initiative)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究活動の推進や新たな発見には、開かれた知識が必要である。特許をはじめとする法的な枠組みにおいても、公共的な利益の面から柔軟性や透明性が求められている。 <p>○Tony Hey (Microsoft) 「Computation Technology and the Power of Open Access」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学術コミュニケーションのライフサイクルは、収集・分析→論文執筆→発表→保存→収集…という循環である。Microsoft は、このライフサイクルのそれぞれの局面をサポートすることを意識している。 ・Coffee Break では、各大学の機関リポジトリ運用者や、政府機関職員と意見交換した。 <p>9月25日(木)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・下記のプレゼンテーションを聴講した。 <p>○Alma Swan (Stevan Harnad 代役) 「Open Access and Research Quality」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果のさまざまな評価指標についての解説 ・オープンアクセスは、評価指標に影響を与えうるか? …パブリックオピニオンを評価指標に反映する可能性 <p>○Maarten Wilbers (CERN) 「A Legal Framework Supporting Open Access」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CERN(欧州原子核研究機構)…研究成果の openness について、昔から意識していた。1950年代からのプレプリントの歴史、WWWの無料一般開放 <p>○Alexander Cooke(Australian Research Council)</p> <p>「Sharing Data Infrastructure」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究活動におけるデータ共有プロジェクトについて事例を解説。 ・Coffee Break では、各大学の機関リポジトリ運用者や、政府機関職員と意見交換した。 <p>9月26日(金)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3つのテーマに分かれ、ワークショップが開催された。 <ol style="list-style-type: none"> 1) Open Access: Making It Happen 2) Managing the Legal Issues 3) Research, Access and Innovation ・“Open Access: Making It Happen”に参加。ソフトウェアの機能、広報、ユーザーへのサポートなど、各大学が機関リポジトリを運営する上で直面している具体的な課題について意見交換した。 ・ワークショップのホストを務めた Queensland University of Technology の Paula Callan 氏と意見交換した。
出張成果	<p>(1) ARROW Discovery Service</p> <p>ARROW Discovery Service の担当者から AIRway プロジェクトに対する理解を得るとともに、技術協力が可能であることを確認することができた。</p> <p>(2) Open Access and Research Conference</p> <p>オープンアクセスという理念から、機関リポジトリのみにとどまらない多様な知識共有の可能性と有用性について知見を得ることができた。</p>

- 【注】
- ◇ 会議、学会等に出席の場合は、講演、座長などの役割、会議概要などを明記する。
 - ◇ 聴講のみの場合には、会議における研究動向、企業や大学の動向、注目すべき発表、日本からの参加者など、会議内容に関する、より詳細な内容を記入する（スペースが足り

ない場合は、適宜、ページを追加)。